

「世界遺産：記憶の遺産・アウシュビッツ、広島」を見て

世界遺産のスペシャル番組「記憶の遺産・アウシュビッツ、広島」を見たが、単に世界遺産の紹介番組でなく、見応えがあった。

世界遺産はユネスコの選定基準により認定されるが、アウシュビッツを人類の歴史の証人、記憶の遺産として認定できるように選定基準に、「6) 顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰、または、芸術的、文学的作品と、直接に、または、明白に関連するもの。」が追加された経緯が関係者の証言等で触れられていた。

その経緯の中で、認定を疑問視する選考委員に、ある関係者の一人は「保存し続けようとする人間の行為そのものは、確実に文化の一部」と説明したという。

また、アウシュビッツ、広島の生き残りの方々の今の想いも取材され、政治、人種等を超えた人類としての世界遺産としてのメッセージも発せられていた。

収容された人々は「生き延びてこの残酷な事実を証言しなければならない」との思いが強く、アウシュビッツの収容所外の作業日に、100人が集団脱走し、僅か5人が逃げおこなっただけのその一人の元囚人は、後になって、脱走の見せしめとして300人の収容者がガス室送りになったことを知る。

この元囚人は、かくまってくれた現在の家を訪ね、かくまっていることが分かると家族全員がガス室送りになる危険の中で食事を納屋の屋根裏まで運んでくれた当時の少女と再会する。

元囚人は、高齢になっていた少女を前にして、「『人間は信じられるか』の問いへの答えがここにある。」と呟く。

広島原爆ドームを含む平和公園を世界遺産に認定する時は、アメリカは原爆が戦争を終わらせたという主張、中国は日本軍によるアジア人民への残虐行為等から反対したが、他の多数の国の賛同を得て認定されたとか。

それだけに、広島で被爆した韓国人の今の想いも取材されていた。

若い人々に講演で伝え続けている元囚人の「かつて人類に敗北をもたらしたことが、今も繰り返されようとしています。記憶こそが生き残る道です。単なるスローガンではありませんよ。」という言葉が、重く、深い意味をもって聞こえてくる。

アウシュビッツ、原爆ドームは、「人類の負の遺産」と表現されがちだが、単なるマイナスイメージではなく、ポジティブに人類愛への信頼・思考する所として守り伝えて行くという、哲学ある場所と云えるのではないだろうか。